

淑徳大学アーカイブズ・ニュース

vol.29

2025.3.10

目次

大乘淑徳学園設立75周年記念 展示室	1
学祖に迫る その7	2
～表紙の写真について～	2
アーカイブズの活動紹介	3
卒業生寄稿	5
アーカイブズ力をつける その7	8
アーカイブズ事務局だより／ご協力のお願い／編集後記	10



学祖に迫る その7 足立叡先生からみた学祖

淑徳大学千葉キャンパスで1年生向けに行われた「長谷川良信の思想と生涯」の講演記録から、このコーナーを構成しています。

第7回は、足立叡先生（あだちあきら 元学長〈2013年4月～2017年3月学長〉、淑徳大
学名譽教授、1945年生）の講演から第6回に続いて事例を引いてみたいと思います。

講演は、「長谷川仏教社会事業論にみる臨床的視点」という内容でした。足立先生は昭和47年に大学に赴任されているので良信先生にはお会いになっていませんが、良信先生が書かれた文章に目を通し対人援助を基盤としたソーシャルケースワークの立場から学生に語り掛けています。

not for him 彼の為ではない but together with him 彼と共にというこの言葉を本学の学生であるときスローガンとして使うのではなく、この言葉の中に込められている深い福祉の実践教育に関わる思想的な意味をきちんと理解していただきたい、と足立先生は具体的な事例を使い説明されました。

そのひとつが難病の子供を持つお母さんの気持ちでした。子供の気持ちを分かってあげなければ、何とかしてあげなければという気持ちが逆に子供ときちんと向き合うことを妨げてしまっていた。子どもが難病になって、多くの方々から「本当にお嬢さんはお気の毒に、本当に可愛そうに、という言葉をいろんな人からかけられた。でも娘は今、私と一緒に一生懸命生きてくれている。なのに、その娘をかわいそうと思うのは、その娘の命に対してとても失



学祖 長谷川 良信先生

礼なことと思います。」このように、お母さんの言葉を引用し、長谷川良信先生の言葉をわかりやすく説明されました。

（1998年6月19日の録音音声より）

～表紙の写真について～

大乘淑徳学園設立75周年記念 展示室

写真の「大乘淑徳学園設立75周年記念展示室」は、大乘淑徳学園本部（板橋区前野町5丁目5-2）の正面入り口を真っ直ぐ進んでいただき、正面の自動ドアに入り、螺旋階段を下って地下1階、正面の自動ドア（表紙写真）からご入室いただけます。

入室されましたら、芳名簿への記帳のご協力をお願いします。展示室は、平日9時から17時まで開室しています。

2024年11月30日、大乘淑徳学園設立75周年記念式典にあわせて、学園本部地下1階に展示スペース「大乘淑徳学園設立75周年記念 展示室」を準備いただき、学園のこれまでの歩みを振り返る展示を展開しています。

展示は、大乘淑徳学園の設立時の貴重な資料に加え、写真やグラフ・年表の作成も進めました。展示室設置実務は、新しくできる長谷川良信記念館顧問伊藤暢直氏、学園本部職員とアーカイブズとで協力し準備していますが、写真やグラフ・年表の基礎データは学園本部、そして、学園の各部門の教職員の皆様からのご協力で完成しました。展示室は短期間の準備期間で、学園全体で力を合わせて作り上げたものといえます。

多くの教職員の皆様のご協力を賜りましたこと、重ねてお礼を申し上げます。まだ展示をご覧になられていない方は、是非、展示室の見学にお運びいただけますようお願いいたします。

アーカイブズの活動紹介

事務室は、千葉キャンパス1号館の校庭側3階に所在しています(事務室の窓からは善財童子像や一期生の桜が望めます)。職務は大学内の教職員に加え、学園の皆様、学外の関係者にご協力いただき、連携させていただき進んでいます。アーカイブズ事務室の活動についてご紹介します。

資料調査

今年度も、大念寺(茨城県稲敷市)で古文書調査を実施しました。調査にあたり大念寺の御住職古矢智照様はじめ関係の皆様大変お世話になりました。今年度は4回にわたり調査に入りました。



活動紹介

淑徳大学アーカイブズ・古文書ボランティア

古文書ボランティアは、毎月2回金曜日に古文書の読解の作業(大念寺文書)を進めています。時には展示準備の一翼を担っていただくなど、作業内容も相談しながら進めています。



所蔵資料のケア

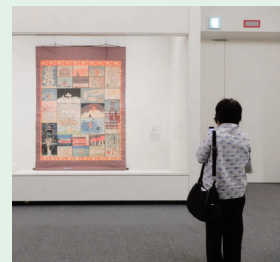
学祖長谷川良信先生着用の洋服をアーカイブズでお預かりしています。7月下旬に虫干しを致しました。また衣装の点検作業の過程で、良信先生がご使用の日用品が見つかっています。



宝物殿の協力

アーカイブズ事務室は職務内容が共通することもあり、大巖寺宝物殿開館(毎月火・土曜各1回)に協力しています。今回、大巖寺所蔵の『大巖寺曼荼羅』貸出に協力しました。

槇英子先生のプロジェクトがきっかけで事務室も協力し大巖寺所蔵『大巖寺曼荼羅』(岡田魚降森筆)調査を進めています。島根県立美術館貸出・返却時には立ち合いをし、県立美術館にも槇先生・末永昇一先生に同行し視察に赴きました。視察の様子は大巖寺文化苑発行の『大巖寺宝物殿ニュース』第23号(令和7年1月)に槇先生がご執筆されています。



聞き取り

アーカイブズ事務室では、卒業生や教職員の皆様から「聞き取り」を行っております。出来事やその体験した人から教えていただき、資料の理解につなげています。個人個人に教えていただく場合もありますが、念願がかな



い、12月14日に9名の一期生の皆様にお集まりいただき、座談会形式

でお話をお聞きしています。幹事の細谷昭夫さんを中心に1年以上前から準備を進めて参りましたが、長谷川所長にも同席いただき、2時間以上にわたり、お話を伺いました。遠方よりお集まりいただいた一期生の皆様には感謝しかありません。記憶を繋げていただくために

1号館2階でミニ展示も開催いたしました。また座談会開催にあたり、同



窓会事務室・アドミッション千葉オフィスの職員の皆様ほか、ご協力いただいています。

座談会の様子は改めて発信いたします。

見学

毎年、4・5月頃には、ゼミ、時には学年単位で、展示室にご来室いただいております。毎年必ず見学の予定をたてているゼミもあります。写真は5月18日、地域創生学部1年生79名(付添先生4名)見学の時の様子です。



見学は、4階の学祖展示室・3階の吉田久一展示室(常設展)・アーカイブズ特別展示室の3室を一

緒にご見学いただくことをお勧めしています。見学ご希望は、事務室までご連絡ください。

特別展示室

特別展示『メッセージの歴史—広報誌にみる学園・大学の歴史—』を2024年10月26日～11月30日に開催しました。

学園設立75周年の記念展示の関連展示で、写真パネルを中心に広報誌から学園の歴史と大学の歴史を振り返ります。展



示を展開しています。学祖長谷川良信先生の記者としての一面が見える資料として、自筆原稿も展示しました。(後期:2025年5月から開催予定)

所蔵写真資料紹介①

一期生の桜(10号館脇)

千葉キャンパスには、一期生が植えた桜があります。この桜の物語です。



一期生の細谷昭夫氏 現在の桜満開の様子

によれば、卒業式の日には桜の苗木を植えることは、野口正蔵助教授・学生課長の発案でした。学生たちの面倒をよく見てくださる方だったそうです。桜を手配したのは、環境整備を担当する花沢了(はなざわ さとる 嘱託職員・総務課造園)氏でした。キャンパスの植栽計画を作ったのがこの方だったそうです。

植樹したのは、卒業式の式典後で、植樹のあとに1号館前で記念撮影をしたそうです。今の場所に移される前は、写真にも写る講堂(現図書館付近)前のガレージの前に植えたようです。当時、正門(現南門)から現図書館あたりは民間住宅も建っていたそうです。



〈写真データ提供 細谷昭夫氏(一期生)〉

卒業生寄稿

「学問の基礎」は「生きるの基礎」だった

—出会いから40年目の同窓会—

静岡県在住 大久保 功

(20期生:昭和59年4月～昭和63年3月)

2024年11月23日(土)晴れ

1984年(昭和59年)4月入学の淑徳大学第20期生。そこから振り分けられた「学問の基礎」(担当:笠井清先生)のメンバーが再集結しま



【大久保 功さん】

した。現在の「淑水記念館」(1号館)通称「マル館」前に集まった面々は、多少容姿は変われども映し出される表情はあの頃のままでした。

学内をぐるりと散策。変わった風景と変わらない風情が交錯し、しばしそれぞれの回想タイム。ふと思い出した「あのとき」のことを語り合いながら、40年の時を経た楽しい時間の共有でした。

* 「学問の基礎」笠井ゼミ *

必修科目の「学問の基礎」。今思えば、何という贅沢で素晴らしい授業であったか。右も左も分からない初学者たちを、経験・実績豊富なベテラン教授が、大学での授業の受け方、学問との向き合い方、ディスカッションの取り組み方など、懇切丁寧に教えていただきました。

同窓会当日、私が企画したクイズコーナーでこんな問題を出題しました。

〈問題〉学問の基礎「笠井ゼミ」で使用していたテキストのタイトルは何だったでしょう？

〈答え〉『人間—過去・現在・未来』(岩波新書)

さすがに覚えていた人は誰もいませんでしたが、当時のゼミの形態を誰もが思い出したようです。確か水曜日の3限、マル館の教室、予め先生から担当するテキストのページの指示を受け、毎週2人ずつが発表者となり、その章の要約と自らの考え方を述べるものでした。慣れない発表には緊張感があり、しどろもどろな様子は皆共通しておりましたが、笠井先生は発表に対する評価は一切しませんでした。淡々と発表を聴かれて適宜補足し、そして先生がご自身の考えを述べる。その一連の授業展開の中に、先生特有の「見守り力」と、人として生きることの大切さを伝える「メッセージ力」が感じられました。



【笠井 清先生】

* ある日の休講の翌週 *

「先週はちょっとお休みを頂きました。私の住む群馬県赤城村の自宅の三軒隣で葬儀があり、どうしても避けられない事情でした」「村八分って聞いたことがあると思います。その家とは八分は付き合わないけど、二分だけは関与する。その二分とは、火事と葬儀なのですね」先生のゆったりとした口調で、わが国特有の相互扶助や地縁、人との繋がりなどの話をしてくださいました。先生の講義は「説明」でも「説得」でもなく、聴き手に何かを感じさせる卓越した「話術」ではなかったかと存じます。

ゼミはもとより、大学生活において各々が何かを感じ、刺激を受け、感性を磨き、人生に活かしてきた。40年の日々を着実に生き、今日再会したメンバーはその時に「生きるの基礎」を学び得たのではないかと思います。

＊ ちょっとした時代背景の共通点 ＊

新紙幣の発行、オリンピックの開催など、1984年と2024年にはいくつかの共通点がありました。ちょうどその頃から、いわゆる「アイドルグループ」が台頭してきました。当時大活躍の『おニャン子クラブ』のメンバーだった新田恵利さんが、現在は淑徳大学の客員教授でいらっしゃるという話も印象的です。



【1年前期打ち上げコンパ】

最近では「ノンアルコール指向」が高まっていますが、我々の基礎ゼミではちょっとした「時代の先取り」をしていました。1年生です。飲酒はご法度。ですが…昭和の時代でしょうか、先生も含めてある程度は嗜みます。(当時の時代背景を勘案した「時効話」としてお読み取りください)

男女半々のゼミ。やや、おとなしめの女子メンバーから「みんなお酒がないと集まらないのかなあ〜」「それだと参加は遠慮したいなあ〜」などという話を耳にします。私は思いました。「そうだよ、目的はお酒じゃないよ、皆で集まって楽しむことだよ」ちょうど12月の初めごろ男子メンバーを中心にゼミの忘年会の企画が浮上していたときのこと、「今回はお酒なしのクリスマス会にしようよ!」「みんなでプレゼントを持ち寄って交換会をしよう!」と提案。

その意見は割合すんなりと受け入れられ、市内のイタリアンレストランで開催しました。その日はなんとゼミメンバー全員が参加。発案者の女子はキーボードを持参し、演奏を披露してくれました。(さすが、保育系履修者!)

今回の同窓会も「プレゼント交換」の伝統は続き、北は秋田県から南は沖縄県まで、さまざまな名産品が持ち寄られました。秋田からは「あきたこまち」の引換券。それも既製品の商品券ではなく、手作り感満載のギフト券を作って持ってきてくれました。また「後日ハガキでリクエストを」といった、お手製のカタログハガキを持ってきた人も。みんな歳だから、重い荷物をなるべく避けようと考えながら創意工夫が勝る、この時代、この年齢、そしてこのゼミならではのプレゼント交換でした。

最近ではノンアルコール飲料の市場が拡大し「お酒を飲めない人も一緒に楽しもう!」というCMが流れますが「僕らはもう40年前からやってたよなあ」と思います。お互いの状況や心情を理解し、そして本当の目的をきちんと共有し合える最高の仲間たちです。



【山中湖研修センター。基礎ゼミでは珍しい「ゼミ合宿」。1年生の終わり(1985年2月)】

＊ きつといろいろあった40年 ＊

その日の同窓会は、過去を振り返るような苦労話を持ちこむような人は誰もいませんでした。皆、朗らかで、優しい表情で「また会えてよかったね」といった感じの「ほっこり」としたひと時でした。同窓会でありがちな「今、何してる?」的な話もそんなには話題にならず、ただただ、あの時と変わらないメンバーの声や

口調や雰囲気を楽しみながら、「何か話せば面白い」といった感じの流れです。そんな中でも、お互いの雰囲気や空気感を感じるとる力、傾聴力や共感力は皆素晴らしいものでした。

もしかしたらそれも、笠井先生があの方に伝えてくださった、人としての生きるための大切な能力ではなかったかと思います。

* 今から、そしてこれから、 *

今、多くの人が「LINE」の便利さを享受しているようです。同窓会の余韻でメンバーがだいぶ盛り上がり「グループLINE」も構築したとのこと。しかし私は、メンバーでただ一人利用しておりませんでした。「早くやんなヨ」なんて散々ご教示を受けましたが、メンバーは優しいもので、「この情報はアイツにもメールで伝えてやってよ」という感じで誰からともなく情報共有を得られております。再会したメンバーは各自で、個別に会う約束や連絡先の交換なども。結婚、子育て、仕事、孫の誕生など、ライフステージを振り返り、「さあ、最初に次のステージへ招かれるのは誰か？」なんていうブラックジョークも笑って話せる間柄です。「村八分の二分。葬儀は義理欠けないからね」と言いながら、これからも「生涯の友」として、互いを確認し合えた1日でした。



謝辞: 当日の会をサポートして頂きました大学事務局・アーカイブズ職員の皆様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

あとがき 1984年度笠井基礎ゼミの動向
【1984年】

- 4月 20期生入学式
九十九里浜でフレッシュマンキャンプ
(ここで初めてメンバーが集結)
- 5月 更科総合グラウンドで体育祭
ゼミでソフトドリンクを販売
初めてのゼミコンパ『ニュー丸栄』
- 7月 入学後初の定期試験(前期試験)
前期打ち上げコンパ『コンパ伝言板』
- 12月 アルコールを提供しないクリスマス会
を市内のイタリアンレストランで開催

【1985年】

- 1月 後期試験終了・山中湖研修センターでの「ゼミ合宿」の話が持ち上がる
- 2月 貸切バスで山中湖研修センターへ
富士急ハイランドなどで楽しく過ごす
- 7月 翌年度入学の後輩ゼミメンバーと
学食2階にて合同のコンパを開催

【1988年】

- 3月 20期生卒業式

【1994年】

- 7月 「出会いから10年目」の同窓会開催
(静岡県伊東市にて)

【2024年】

- 11月 「出会いから40年目」の同窓会開催
(淑徳大学千葉キャンパスにて)

笠井清先生プロフィール

淑徳大学教授として、1973年～1996年に教鞭をとる。児童教育研究室開室にあたり赴任し、社会科教育法、倫理学などを開講し「学問の基礎」の授業も受け持つ。

アーカイブズ力をつける^{りょく}

その7

アーカイブズ資料の活用その歴史的価値

今回はアーカイブズ資料の活用と、資料の歴史的価値についてとりあげます。

アーカイブズ資料は、保存して後世に伝えることも重要ですが、それを活用しなければ遺している意義がありません。資料のためには利用によるストレスを与えず、温湿度が整った設備で保存しておくのがよいのですが、それでは資料が持っている様々な価値が見出せません。アーカイブズ資料は利用者に使われてこそ、資料の価値が認識されます。それに併せてアーカイブズ機関の存在も認識されていきます。

しかし日本のアーカイブズ機関は未だに社会のなかでの認知度が低いのが現状です。その根底にある要因の一つとして、アーカイブズ資料の活用が伴っていないためではないかと個人的には考えています。

* * * * *

まずアーカイブズ資料の活用には大きくわけて二つの種別があります。

一つは遺された資料を解読しその内容から当時の状況を見出していくことです。

このことは明治時代や江戸時代、あるいはそれ以前の時代の例がわかりやすいでしょう。これは現在まで遺り、伝わった古文書、あるいは木簡などから当時の様子を探る方法です。例えば、江戸幕府や江戸時代の各町や村に遺された古文書から、当時の出来事を探ることです。社会状況や生活習慣の変化等で現在は消滅してしまった当時の状況や、町の変化等を史料から解明することがこれにあたります。

これは歴史を解明することといえるでしょう。このような事例は日々のニュースで話題になるので、枚挙にいとまがありません。

* * * * *

もう一つは、現在の状況をアーカイブズ資料によって裏付ける活用です。証拠として資料を利用することになります。

この方法については、秋田県の田沢湖の固有種で既に絶滅したはずのクニマスが、富士五湖の一つの西湖で生存していたことを例にご説明しましょう。このクニマスの生存については、タレントのさかなクンが発見し、その後2010年12月の天皇陛下(現在の上皇陛下)の誕生日の記者会見でご発言されたことなどで記憶に残っている方も多いでしょう。



経緯を簡単にまとめると、田沢湖で昭和初期に水力発電による電力を確保する目的で水量を多くするため、他の川からの水が流れ込むようしました。その川の水質は、温泉の成分を含んだ酸性だったため、その影響で田沢湖の水質も酸性になってしまいました。これにより、田沢湖の固有種であったクニマスが絶滅したということです。そして70年余の後、西湖でクニマスが生存しているのを発見したという流れになります。

では、なぜ田沢湖の固有種であるはずのクニマスが西湖で生存していたのでしょうか。絶滅前に移植したのか、あるいはそもそも田沢湖の固有種ではなく他の湖にも生息していたそれが発見されたのか、色々な疑問が浮かびます。これらの疑問について、アーカイブズ資料を活用することでその答えが明らかになってきます。

* * * * *

クニマスの生息が西湖で確認された後、山梨県立博物館では、2012年7月14日～9月3日、クニマスの展示が開催されました。

その時の成果報告論文(「田沢湖のクニマス漁業と孵化・移植事業－三浦家資料の分析－」)によると、昭和10年(1935)に秋田県水産試験場を通じて地元の漁業組合に対して、クニマスの卵を西湖・本栖湖の両漁業組合に10万粒を分譲するよう通知があったことがわかります。それにより卵が移植され、その子孫が生存していたというわけです。移植の根拠は、同論文では言及していないので不明です。展示や報告書では、秋田県の三浦家という江戸時代から田沢湖でクニマスの養殖を営

んでいた家のアーカイブズ資料が使われています。

報告書には簡単な資料目録が掲載されており、秋田県水産試験場や地元漁業組合の書類や、西湖・本栖湖両漁業組合とのやりとりをした文書なども含まれています。ただこれらの文書だけでは、計画のみで実際に移植が行われたのか断定出来ません。

移植が行われたという決定的な証拠となる資料は何か。

それは、この資料中に卵10万粒を輸送した運送会社の領収書です。この領収書が遺っていたことから、移植が実際に行われたことがわかったのです。この領収書の存在で移植が行われたことが証明されたといえます。まさにアーカイブズ資料によって、西湖でクニマスが生存していたという現在の状況を裏付ける証拠になったわけです。当然のことながら山梨県立博物館の展示にもこの領収書は出品されました。

* * * * *

今回のようなアーカイブズ資料が、ある事実の裏付けになり得るということは、他の事象でも同じことがいえます。

例えば、土地の係争の裁判において、境界や所有権争いなど、昔はどうなっていたのか、どのような経緯で今の状況になったのかをアーカイブズ資料から確認することがあります。実はアーカイブズ機関の利用者のなかには、弁護士や土地測量士の方の利用が多いのも事実です。これは、アーカイブズ資料が、土地の境界線確定や所有の証拠になるからです。このことを拡大して考えると、国の領有権を国際的に主張する根拠にもなるといえます。

* * * * *

続いて領収書の歴史的価値について考えてみたいと思います。

まず歴史的価値ということの意味は、簡潔にいうと、歴史的にどれくらい大切か、歴史の証明に役に立つかということです。領収書には、依頼した行為が完了し、行為に対して金銭の支払いがなされ、受領したという事実を証明する役割があります。

今回の領収書の場合、クニマスの卵の輸送が完了したこと、その輸送代金が支払われたこと、この二つの役割があります。発行当時

は、依頼主と輸送業者で、行為の完了とそれに伴う輸送代金授受の完了が領収書を通じて共有されていました。私たちがスーパーやコンビニで受け取る領収書同様に、どちらかという代金の支払いが完了したことに対する役割の意識の割合が大きかったのではないのでしょうか。

しかし、ある程度の時間が経過すると、当事者同士の金銭授受の意識は少なくなってきて、輸送が完了したことの事実の方が大きくなっていくように思います。厳密に言えば、こうしたことは、当事者以外の人からみると、時間の経過と共に金銭授受に関しては関わりがないためその意識が薄れ、もう一方の輸送が完了したことに焦点があてられるようになったためといえるでしょう。このような焦点のあて方が、今回のクニマスの輸送の裏付け、歴史の証明に役立ったと考えられます。

当時、田沢湖のクニマスの輸送を依頼した人たち、卵の輸送に関わった輸送業者たち、田沢湖や西湖・本栖湖の漁業に関わる人々は、この時に発行されて、受け取った領収書が、後々このようなことに活用されるとは想像もしなかったことでしょう。

* * * * *

今回の領収書にみるように、裏付けとして、アーカイブズ資料を活用することで、その資料の価値を見出していくことに繋がります。また、資料は当事者の思いとは別に、いつどこでなにを証明する価値を有しているのかわからないということも伝わったのではないかと思います。

当然のことですが今回紹介した価値は、資料が数多く持っている価値のうちの一つにすぎません。資料は、多くの価値を有していますし、また全ての資料には様々な歴史的価値を有しています。少し発想を変えて、アーカイブズ資料を利用すると以外なことがわかるかもしれません。

次回もアーカイブズ資料の活用と、資料の歴史的価値について、別の事例から話を展開します。

イラスト 刈谷水月さん

担当 清水邦俊 認証アーキビスト。淑徳大学アーカイブズ叢書翻刻メンバー。

アーカイブズ事務室だより

事務室活動記録

(2024年1月～2024年12月)

○資料寄贈等(寄贈順): 慈光保育園、湯浅道夫氏、淑徳大学附属千葉図書館、長谷川仏教文化研究所、淑徳大学千葉事務部(総務)、淑徳大学千葉事務部(学事)、長谷川匡俊氏、内藤俊江氏、総合福祉学部学部長室、淑徳大学学長室(千葉)、松崎滋氏、教育実習センター、大久保功氏、細谷昭夫氏、斎藤哲郎氏

○聞き取り(協力者): 大久保功氏、江島一弥氏、川真田喜代子氏、武田逸朗氏、西塚洋氏、長谷川匡俊氏、細谷昭夫氏、淑徳大学一期生(座談会形式)

○資料貸出: 淑徳巣鴨中学高等学校

○資料調査(アーカイブズ叢書): 大念寺(2/11,5/19,7/7,12/21)

○大巖寺宝物殿展示・開館支援: 1/9,1/20,2/10,2/20,3/12,3/23,4/13,4/23,5/7,5/18,6/11,6/22,7/10,7/23,8/10,8/27,9/7,9/24,10/12,10/26,10/27,10/29,11/9,11/26,12/10,12/23

○協力: 学園本部設立75周年記念展示室、長谷川良信記念館展示準備、としま歴史講座(9/14)

○産業現場実習受け入れ: 市原特別支援学校鶴舞分校(9/30～10/4)

○視察: 幸手市郷土資料館(2/8)、上尾市自然学習館(2/8)、島根県立美術館(9/28)

○特別展: 「福祉の先覚者 長谷川良信一良信先生の夢と挑戦」(後期5/7～5/31)、「メッセージの歴史—広報誌にみる学園・大学の歴史—」(前期10/26～11/30)

○刊行物: 『淑徳大学アーカイブズ・ニュース』第28号(2/22刊行)

〈ご協力のお願い〉

*特に福祉関係の資料を収集しております。寄贈を希望される場合は、アーカイブズ事務室へご相談ください。

*各部署で廃棄の状況が生じた書類等については、アーカイブズ事務室へご相談ください。

*各部門・部署で刊行された冊子などは、年史を編纂するときや、遡ってその時の状況を振り返るときに必ず役立ちます。日ごろから寄贈にご協力いただいておりますが、データでの寄贈もお受けしています。

〈編集後記〉

アーカイブズ事務室の活動にいつもご協力いただきありがとうございます。

今回の卒業生からの寄稿は、20期生の大久保功氏から頂戴しました。アーカイブズの勤務状況から、偶然に来校時にお会いしたことによるご縁から始まりました。ご好評いただいております「アーカイブズ力をつける」も身近なところにある話題が取り上げられています。

アーカイブズの思想を身近に置いていただくことで、社会が豊かになることに繋がり、かつ将来に向けて様々なことが続いていきます。今、そして現場にてご健闘いただいている皆様へそのようなことをお伝えし続けて参りたいと思っております。引き続きご協力の程、お願いいたします。(大寫 聖子)

淑徳大学アーカイブズ・ニュース 第29号
令和7年(2025)3月10日 発行

淑徳大学アーカイブズ

〒260-8701

千葉市中央区大巖寺町200 1号館3階

TEL 043(265)7526 <直通>

メールアドレス archives@soc.shukutoku.ac.jp

